

天野為之編『実業新読本』を読む

—— 発明, 国際貿易, 福澤諭吉⁽¹⁾ ——

池 尾 愛 子

1. 序

2014年9月6-7日の南開大学国際シンポジウム「日本近代化過程における改革・社会変動とガバナンス」(天津), 10月18-19日の国際二宮尊徳思想学会北京大会で, 天野為之編『実業新読本』を盛り込む報告を行ったところ, 非常に評判がよかった⁽²⁾。2つの報告は2014年10月11日の日本経済思想史学会例会でも紹介して, 好評を得られたと感じた。この際の報告は, 同年7月に入手した『実業新読本』を急いで中国での報告用に取り込んだものであったので, 読本それ自体が優れたものであったことは間違いない。天野自身が忘れられた経済学者であり, 彼編集の『実業新読本』も埋もれていたが, 大正時代における経済学の変化を観察することができる資料となる可能性が高いので, 掘り起こして検討する価値があるといつてよい。

-
- (1) 本稿は, 学会発表用論考の池尾(2015bd)を併せて一論文にしたものである。研究発表の際に有益なコメントや質問をいただき, 本論文草稿にもコメントをいただいた。日本経済思想史学会の中村宗悦氏, 西岡幹雄氏, 菊池壮蔵氏, 山本長次氏, 荒川憲一氏に特に感謝する。
- (2) 池尾(2014c, 2015)は, 天野(1902a)の中国語版天野(1902b)があることがきっかけで, 中国での発表につながった。池尾(2015a)は中国の日本研究者達にもわかるように執筆したので, 天野に馴染みのない日本人にもよく理解できると考えている。

2014年秋、中国で天野為之について研究発表をした時は2回とも、福澤諭吉には触れる余裕がなかった。しかし、日本で天野を語る時には福澤に触れないわけにはいかない。福澤は実際、開国後の啓蒙活動や（高等）教育の向上における貢献をみると、余人をもって代え難い別格の存在であった。天野は福澤の著作をほとんど読んでいて、受け容れられることと、受け容れられないことを明確に区別していたといえる。

そこで本稿の狙いを、天野為之（1861－1938）の編著『実業新読本』（全5巻、1911年、1913年改訂版）をさらに検討するとともに、福澤諭吉（1835－1901）の議論との比較に取り組むことにおく。

第2節では、『実業新読本』で天野が参照・引用した文献について、福澤以外のものを検討する。第3節では、天野が福澤の議論から受け容れたものそこから発展させたものを論じる。第4節では、天野が福澤の議論を受け容れずに展開したものを確認する。第5節では、1919－20年の高等教育制度改革のあと、経済学に対する考え方が変化し、道徳が経済学から追い払われたことを示唆する。

2. 西欧の影響力の日本化

天野為之編著『実業新読本』は、「各種実業学校および実業補習学校等の読書教科書」として使えるように編纂され、1911（明治44）年に初版が明治図書より出版され、1913（大正2）年に訂正再版が富山房より発行された⁽³⁾。第1巻の緒言に、同書編纂の目的がある。「(1) 学生に質実穩健の時文を読み、かつ、文章力（綴るの力）を発達させること、(2) 実業道徳および一般道徳の観念を養うこと、(3) 健全なる経済上および実業上の常識を得ること、(4) 特

(3) 浅川次郎・西田長壽の伝記『天野為之』（1950）では、天野為之編著『実業新読本』に触れていない。2015年9月に富山房に電子メールで問合せた際、坂本起一氏に調査に協力していただいたものの、出版部数などの記録は残っていなかった。

に日本の伝統と歴史を明らかにすること等にある」とされた。

目的（1）で述べられた「質実穩健」について解説が必要であろう⁽⁴⁾。「質実剛健」の四字熟語の方が知れ渡っているからである。第一に、天野が「剛健」を否定していなかったことは比較的よく知られているようだが、大正11年の天野の早稲田実業の「新卒業生に対する訓示」（1922: 18）から、次の箇所を現代文に近づけて引用しておきたい⁽⁵⁾。

この学校のいわゆる精神は華を去り実に就くという、質素主義、儉約主義、儉約にして剛健の気を養うことが学校の精神であるから、…どうか堅く実際の上に実行して貰いたいということを希望するのであります。

第二に、「穩健」の部分である。天野は大正14年の「新卒業生に対する訓示」（1925: 20-21）において、格言『春風接人秋霜自肅』を紹介して次のように語っているので、多少の拡大解釈を含むかもしれないが、天野が生徒・学生達に伝えたかった「穩健」を理解する上で参考になるかもしれないので引用しておきたい。

春風をもって他人に接し秋の霜をもって自ら肅（つつし）む。これ昔からの格言である。言うまでもなく他人に接する場合には、春風の万物を吹くが如く極く温かに穩かに親切にしなければならぬ。博愛衆に及ぼすという精神を現したものである。とにかく日本人は春風人に接するということが少い。…どうぞ諸君は学校を出た以上は、博愛の精神をもって人に接し、春風をもって人に接するという、ごくジェントルマンリー、すなわち紳士

(4) 2015年6月に日本経済思想史学会年次大会で発表した後、『質実穩健』はタイプミスで、『質実剛健』が正しいのではないかと指摘を受けたが、ミスではない。関連する文献・資料探しでは、早稲田実業の木下恵太氏に大変お世話になり、最終的にご意見を大いに参考にさせていただいた。

(5) これ以降の引用文についても、現代かな使いにするなど現代文に近づけることにする。

的君子的の考えをもって世の中に臨むことを希望する。『秋霜（しゅうそう）自ら肅む』は即ち秋の霜が万物を枯らしてゆくように、自分の身を省みて、自分の身に悪い事があったならば、秋の霜の木の葉を枯らして行く如く悪い事をどんどん刈取って行くというように自分を慎んで行かねばならぬ。…人を責める時は寛大で自分を責める時は厳粛であって欲しい。すなわち春風人に接し秋霜自ら慎んで行くというようにしたい。

天野編著『実業新読本』には、こうした調子で、道徳的要素がふんだんに盛り込まれているので、上の引用も彼の教育方針を知る上で大いに役に立つ。

『実業新読本』の中には、天野が書き下ろした文もあれば、他の著者による文からの引用もある。後者の場合、ほとんどが日本人の書いた文からの引用であり、西洋文献の消化が着実に進み、「欧力の和化」(Japanization of European influence, 新渡戸稲造の表現⁽⁶⁾)が着実に進行していたことがわかる。また同書では著者名だけ記載されていて、引用元の書籍タイトルや掲載雑誌が記されていないものが多く、再引用も散見される。それでも、次のような興味深い特徴を記すことができる。

第1に、『実業新読本』全5巻を作成するにあたって最良の手本となったのは、ロンドンで出版されていたピットマン (Sir Isaac Pitman, 1813-1897) の商業読本シリーズ (Pitman's commercial series) であったと思われる⁽⁷⁾。参考文献として明記されているピットマンの『商業読本』(Commercial Reader: Senior Book, 1905) は、本文170頁のコンパクトな書籍であるが、写真、挿絵、

(6) 新渡戸稲造「泰西思想の影響」(1908), p.164, 英語版 p.459. 新渡戸の章の英語版の文体は他章とは異なり、独特の英語表現が用いられているので、彼自らが英訳したと思われる。

(7) 早稲田大学中央図書館にピットマン・シリーズの読本が揃っている。商業読本以外のタイトル・テーマには、簿記、会計、速記(「at」を「@」で表すなどの簡略表記を含む)、商業政策、商業辞典、ビジネスマン・ガイド、商業地理、損害保険辞書、生命保険辞書、秘書向け商事法務、広告・印刷辞書、商業書簡、経済学原理、商業原理と実践、産業別業務マニュアル(ジャーナリズム、運輸)、地方自治体管理などがある。

地図をふんだんに使い、最新鋭の工場や電信技術を紹介して、読者を国際ビジネスへと誘う構成になっている。天野はピットマンの『商業読本』の日本版を作成することを目標としたといつてよい。

第2に、日本語で既に出ていた幾つかの『読本』を参考にして、質量ともに大幅に改良されたものにしたことである。そして定評のある文について、再引用したといえる。天野が参考文献として明記して引用した読本に、『明治実業読本』、『日本実業読本』、『新訂日本実業読本』、『工業読本』、『国民読本』、『中学読本』がある。全ての読本を現在閲覧することは困難であるが、『実業新読本』洋綴じ全5巻は、図こそないが、極めて勝れたものように見受けられる。

第3に、天野は引用文献として書名をあまり記さなかったが、1907-8年に出版された『開国五十年史』（全2巻、大隈重信編纂）は大いに参考にし、同書の幾つかの章から引用していることが確認できる。同書は日本語、英語、漢文で出版されており、大隈が渾身の力を込めて世界に向けて「新しい日本」（New Japan）の情報を発信するために作成したことがうかがえる。天野は益田孝の「外国貿易」、伊藤博文の「帝国憲法制定の由来」、井上勝の「鉄道誌」の諸章から引用した。また、『実業新読本』での鉄道、外国航路、会社についての情報は、大隈重信編（1907-8b）『開国五十年史 附録』を参考にしたとみられる。『開国五十年史』には天野自身も塩沢昌貞との共同章「商業教育」を寄稿している。

第4に、天野の引用文の著者達について JapanKnowledge Lib やインターネットで調べると、雑誌『太陽』の寄稿者が多いことがわかる。『太陽』は1895年（明治28）1月に博文館から創刊され、1928年（昭和3）2月に第34巻第2号（通算530冊）まで発行されて廃刊になった。総合雑誌とされるが、英文論説・記事を含んでいたので、日本情報の海外発信を企図したものとうかがえる。英文誌名は当初 *The Sun* であったが、1902（明治35）年7月5日号から *The Sun Trade Journal* に変っている⁽⁸⁾。

本節の最後に、『実業新読本』での経済・商学・実業道德に関係する引用文献の著者名等を各巻毎に記し、目次は本文の後に掲げることにする。

第1巻 本居宣長／徳富猪一郎（蘇峰）／落合直文／志賀重昂／ピットマン商業読本／竹越与三郎

第2巻 福沢諭吉－福翁百話・福翁自伝／井上哲次郎／横井時冬／工業読本／巖谷季雄－洋行土産／小田内通敏，中学読本／清国国文教科書／ピットマン商業読本／新保馨次／中村正直－西国立志編／フランクリン談－中等国語読本／穂積陳重／日本実業読本／坪谷善四郎／西村茂樹

第3巻 手島精一／横井時冬／大隈重信－国民読本／井上勝－開国五十年史抄録／久松義典－岩崎彌太郎／徳富猪一郎（蘇峰）－冒険心／訂正読書科教本／日本国史／カーネギー，富の福音－新訂日本実業読本／安田善次郎談－再訂明治読本／森村市左衛門－福沢先生より受けたる感化／東京会議所月報／沢柳政太郎／姉崎正治／小笠原長生

第4巻 横井時敬／岩住良治／高山甚太郎－東京商業会議所月報抄録／幸田成行（露伴）－努力論／宮崎駿児－報告抄録／渋沢栄一／伊藤博文／日本実業読本－公德養成／日高真実／明治実業読本－立身策／井上哲次郎／西郷隆盛／井上哲次郎／徳富猪一郎（蘇峰）／中村正直／芳賀矢一／〔二宮尊徳〕⁽⁹⁾

第5巻 伊藤博文／益田孝／渡邊國武／渋沢栄一の口演／島田三郎－福沢先生を悼む

そして福澤諭吉から受け継いだものについては、次節での検討に回すことに

(8) 雑誌『太陽』のデジタル版はJapanKnowledge Libに収録されている（2015年度）。

(9) 二宮尊徳については天野の書下ろしで、天野は二宮のことを「先生」と呼んだ。天野には富田高慶著『報徳記』[1883]や福住（1893）が利用可能であったが、それ以外の情報源を利用した可能性もある。

する。

3. 発明が社会を進歩させ、貿易が世界を変える

天野為之は『実業新読本』全5巻を通して、交通・通信の革命的進歩、国際貿易の重要性を堂々と語り、「堪能なる技術家、老練なる職工の養成」（手島精一）にも注目した。第1巻と第2巻では、科学技術における発明が利用されてまずは生産現場や通信・交通手段を変化させ、そして新しい消費財の形で商品化されたり通信・交通サービスが商業化されたりして、私たちの生活を大きく変化させていくことが示唆された。天野の主張を要約すれば、「発明が社会を物質的に進歩させ、貿易が世界を変える」となるであろう。

既述のように2014年秋の研究発表では、福澤諭吉に触れる余裕がなかった。日本で天野を語る時には福澤に触れないわけにはいかない。幕末と明治期、福澤の著書は極めて多くの人々に読まれ、その影響は余人をもって代え難いほどのものであった。福澤の著作を読み進めると、天野は福澤の著作をほとんど読んでいて、受け容れられることと、受け容れられないことを明確に区別していたことがわかってきた。

本節では、天野が福澤の議論から採り入れて自分の議論に活かしたものについて考えてみたい（池尾 2015c 参照）。

第1に、発明（技術や技術進歩）の重要性がある。福澤は1866（慶応2）年に『西洋事情』初編を出した時から発明に注目し、1879（明治12）年出版の『民情一新』ではさらに、発明や近代的制度形成、応用につながる学問の重要性を強調した。同緒言から引用しておこう。

1800年代に至て蒸気船、蒸気車、電信、郵便、印刷の発明工夫をもってこの交通の路に長足の進歩をなしたるは、あたかも人間社会を転覆するの一挙動というべし。[『民情一新』] 本編は専らこの発明工夫によって民情

に影響を及ぼしたる有様を論じ、蒸気船車、電信、郵便、印刷と四項に区別したけれども、その実は印刷も蒸気機関を用い、郵便を配達するも蒸気船車に附し、電信も蒸気によって実用をなすことなれば、単に之を蒸気の一力に帰して、人間社会の運動力は蒸気に在りというも可なり。（『福澤論吉著作集』第6巻、pp.4-5）。

19世紀の発明工夫は西洋の「人間社会を転覆する」ほどの影響力をもっており、それらの発明工夫が実用化されるにあたって「蒸気の力」が不可欠の役割を果たしていたと認識された。ジェームズ・ワットによる蒸気機関の発明、これを応用したジョージ・スチブンソンによる鉄道の発明は、福澤の『西洋事情』外編（1868、慶応4）で紹介されている⁽¹⁰⁾。天野は『実業新読本』第2巻第21課「石油及び石炭」でさらに、『工業読本』を参照しながら、「蒸気の力」を生み出す良質の石炭がイギリスで採れたことに注目した⁽¹¹⁾。

英国の石炭は、その質の良さと、産額の大なることによって、世界に名あり。わが国の石炭は、その質良好といえないものの、産額多きをもって、工業の進歩を助けること大なり。（p.61）

(10) 福澤の『西洋事情』は実に影響力が大きかったといえるようで、神田孝平もワットとスチブンソンに言及し、パテント（特許制度）導入の重要性を語っている（南森 2016）。ただし、『東洋経済新報』第40号（1896年12月25日）に、訪問録「高橋是清氏の特許制度沿革談」（pp.16-19）等が掲載されているので、天野は、特許に関する情報については、特許制度の確立に実際に貢献した高橋是清から得ていたと思われる。

(11) アメリカの経済史家ケネス・ポメランツが『大分岐』（初版2000年）において「蒸気の力」やイギリスに炭田があったことに着目しているのを、福澤や天野とよく似た技術史・文明観を共有しているといえて興味深い。ポメランツとステイーヴン・トピックの『グローバル経済の誕生』（初版1999）も国際貿易の威力を扱っており、開国後の日本が貿易によって変容し、また世界を変容させた例として少々意識されている。小室正紀（2002: 369）は福澤が独自の文明観・技術史観を持っていたとしたが、福澤の歴史観は天野、ポメランツ、トピック、他の経済史家と共有されているように思われる。

福澤と天野はよく似た技術史・文明史観を持っていたといえる。

第2に、国際貿易の重要性がある。福澤は『実業論』（1893）では、「実業の原動力は外国貿易であり」、開国後は「汽車汽船の便により、国中で都市も田舎も人々の衣食住が一変したといってもよい」とした。彼は目下の代表的輸出品として、生糸、茶、そしてマッチ、羽二重等をあげて関連データを示し、一見ただちには輸出用にはみえなくても、変形して輸出できるものを発明すべしと唱えていた。彼はさらに、外国貿易には確実に商機がありその「広大無限」の機会をつかむためには高等教育を受けた者（「士人」）の活躍が不可欠だと主張した（『福澤論吉著作集』第6巻、p.318）。

第3に、学問の応用あるいは応用できる学問の重要性がある。福澤は『民情一新』（1879）においても、社会で実用に付される学問の重要性を説いた。福澤は実用に近いところにあると判断したが故に西洋諸国の学問を学ぶことの重要性を唱え続けていた。天野は学問・知識の社会的応用の重要性を受け容れる一方で、応用できる学問を鎖国時代の日本から見つけ出して伝統回帰したり、福澤に感化された日本人たちの新しい著作・言論活動に注目したりしていくことになる。

第4に、天野は第2巻第3課において、福澤の『福翁百話』（1897）から「独立の法」を直接引用していることにも言及しておかなくてはならない。福澤が「人が他人の厄介にならずに衣食住において独立するためには、人は利益のある所に群集し、利益の一部を求めて競争することになる」という主旨で語っている一節である。彼が「競走場裡に営々辛苦せざるべからず」と、「competition」の意味を説明するために、「競争」を（距離毎の）「競走」と言い換えたことから、様々に敷衍して引用される一節となった⁽¹²⁾。続いて天野は、吝嗇と

(12) Competitionの要素は、二宮尊徳の教義にもある。尊徳は公共事業を請け負った際、作業員達を競わせて達成作業量の最も多かった者、作業量は少なくとも特に困難な作業を見出して実行した者を顕彰した。池尾（2013a）、Ikeo（2014ab）参照。

倅約を区別して、「独立の主義を全うせんとならば、吝嗇を避くると共に、節倅の旨を忘るべからず」との一節も引用した。天野はこのように頻繁に引用される文や自分の議論を補強する文を『実業新読本』に盛り込んだといえる。

かくして、天野は『実業新読本』において、発明、国際貿易、学問の応用、節倅の重要性を福澤諭吉から受け継いだといえる⁽¹³⁾。福澤の議論と対照しやすい議論をまず検討して、次に天野が追加していった議論を追ってみよう。天野本人による書下ろし文や福澤との比較、外国の経済学者との比較で興味深いものを中心に、検討してみよう。つまり、さらに、天野が西洋の学問を日本化していくことにも注目しよう。ただし、発明の重要性については、幾つかの箇所から引用可能であるが、国際貿易の重要性については、全巻で訴えかけるようになっていて、特定箇所からの引用だけでは迫力に欠ける状況である。

天野は福澤にならって、『実業新読本』第1巻の第5－6課ではジェームズ・ワットによる蒸気機関の発明、これを応用したジョージ・スチブソンによる鉄道の発明を紹介したといえる。そして、天野は「西洋学問の日本化」を進めた。第1巻の第4課では江戸時代の学者新井白石を紹介し、第7－8課では日本の鉄道の最新情報を提供した。第9課「外国航路」では、開国後、日本の2つの商船会社が確立した定期の外国航路を紹介して、「世界は目前にあり」(p.41)と、若者たちを国際貿易へと水先案内するのであった。かくして、天野も開国後の貿易の威力を実感し、国際貿易を担う人材育成の必要性を唱えるとともに、貿易問題についての考察をさらに深めていった。

天野は第2巻第38課「特許の話」では、発明が社会を物質的に進歩させると、発明の重要性を開陳した。封建時代には、特許制度がなかったため、発明がほとんどなかったとした。いち早く江戸時代の発明家平賀源内に注目し、「非凡

(13) 節倅の重要性について、天野の場合、二宮尊徳や報徳思想からも会得したはずである。二宮尊徳の教義は日本の「経世済民」の伝統につながるとともに、分度（計算可能な一般均衡・持続可能な成長）やインセンティブなど、日本の近代経済学につながっている（西洋の古典派経済学になさそうな要素もある）。池尾（2013a）、Ikeo（2014ab）参照。

の才能をもって幾多の発明を成し遂げたけれども、その労に報う手段〔特許制度〕が備わっていなかったために、非常に困窮して、彼の才能が十分に発揮されたとはいえない」(pp.127-8)と憐れんだ。源内が薬品の開発・薬品会の開催も手掛けたので、漢方医の父を持つ天野には源内を知る手立てがあったと推察される。天野は発明の威力を語り続け、第2巻第34-5課「電気世界」では、「19世紀の文明の半分は電気の力に頼ると言われていたが、20世紀になるとその活用範囲はますます広がっている」(p.115)とした。

続いて、発明と貿易の重要性が簡潔に述べられている箇所を紹介しておこう。第3巻第9課「運輸及び通信」で『国民読本』からの引用である。

運輸機関

過去一百年間における汽船、汽車、電信、電話の発明は、世界の大勢を一変させて。今や電信は一日にして世界の状況を報じ、東西両半球の回遊もわずかに一カ月を要するに過ぎない。かくして地球上の諸国は、航路、鉄道、電線によって、縦横に連結されるようになっている。(p.24)

鉄道

鎖国時代に千石以上の船舶を造ることが禁じられていたので、海の見たる日本民族の雄志も一旦は挫折していた。従って開国以来造船航海の事業共に年を経るに連れて発達し、わが商船は世界の洋上に国旗を翻しつつ航行して、通商貿易に従事している。また国内において2万トン以上の戦艦、商船を製造することが可能になっている。(p.25)

これは当時の共通認識といえるであろう。本課には、鎖国政策批判が含まれている。関連して、第5巻第39課「開港以前の貿易」で、『開国五十年史』から益田孝の「外国貿易」(1908)の全文(貿易データを除く)が引用されていることが目を引く⁽¹⁴⁾。益田の引用文の前半は徳川幕府の鎖国政策や国内の藩外米

穀流通禁止等に対する徹底した批判であり、後半には明治初期の自身の体験を回顧する文を含んでいる。

当時第一の困難は、言語の不通と、慣習の相違であった。大体において内外の商人は、直接の商談を行うことができず、コンプラドルと称する特殊な書記（最初は概して支那人）を使用して、必要な媒介者としていた。そのようなコンプラドルは、今も支那の諸開港場に行われているように、ただコミッションの取得を目的としていて、少しも商業の利益を顧みないので、内外商人は常に彼らによって隔てられ、商業運用に必要なはずの相互間の親密も信用もなく、そのため内商は直接の迷惑を感じ、現金を支払わなければ貨物を引取ることが不可能で、貨物を引渡さなければ支払を受けることが不可能な状態である。

当時、貿易の権利は、日本商人の気力乏しく、資本少なく、組織を欠く等のため、全く外商の掌握する所となっていた。 …

それでも、直接貿易を開始したる日本人もまた少なくなかった。その成功によって、現時各港に純粹の日本貿易商を見ることが多くなり、各種の重要貿易品を取扱うために、世界各地に支店を有する者も現れた。

… 幕末に攘夷論が沸騰して以来、諸藩が争って軍制を改革し、明治の初め益々これを拡張し、その代価は、外商に対する負債となり、冒険の外商は、特に資金を貸与した者があった。明治の改革は、この債権をすこぶ

(14) 益田孝(1848-1938)は佐渡生れで、家族で函館に移った時から英語を学び、1861(文久元)年に外国方通弁御用として麻布の米国公使館に勤務した。文久3年に遣欧使随員の父の従者の資格で渡欧した。明治維新後、横浜居留地のウォルシュ=ホール商会に勤めて、貿易業務を習得、その頃、井上馨と知り合い、先収会社の創立にも参加した。明治9年に先収会社が解散し、その頃、新しい商社の設立を計画していた三井に招かれて三井物産会社の社長に就任した。三井物産は益田によって日本屈指の商社に発展した。明治40年に益田は、ロスチャイルド家など欧米各国の富豪・銀行家・法律家を歴訪して財産と事業管理の方法を調査し、三井家の事業組織の改革を実施した。(岩崎 2015)

る不安ならしめたけれど、秩序が回復するにつれて、政府は各藩の負債を引受け、特に外人に対する負債の償却には、現金をもって支払ったので、彼らは予想外の巨利を得て、その現金を貿易の資本に投入したのであった。このことは実に、明治初年において貿易が振興した一原因なのである。(pp.153-6)

開国してから、国際貿易が何とか軌道に乗るまでの苦労と努力が伝わってくる。

国際貿易に関連して、天野は第2巻第1－2課で独特の分業論を展開する。農家が土地の性質を把握して栽培する農作物を選ぶように、人は才能に応じて職業を選ぶもので、官吏になったり実業家になったりするものである。明治の世になって、交通運輸の道が開け、各地で分業が進んで実業が発達するようになり、貿易による国際分業も行われるようになったとする。E. ヘクシャーやB. オリーンの「各国での生産要素の賦存率の相違が貿易の源泉の一つである」とする議論が想起される⁽¹⁵⁾。

天野は第2巻第56課では、西村茂樹筆の「国民の義務」を紹介する。西村は、「国民の国家に対する最大の義務として納税と兵役である」とする。福澤も天野も国防意識が高かったことは記しておくべきであろう。

天野は第2巻第28課では、ピットマンの『商業読本』（1905、第28課）を参照して、イギリスのタイタス・ソルト卿（Sir Titus Salt）のアルパカ（Alpaca）という新原料を利用して、新製品の織物を開発したことを紹介した。J. A. シュンペータの新結合・革新とよく似た議論になっているのは、シュンペータがピットマンを読んでいたからかもしれない。

第3巻第14課「冒険心」（徳富猪一郎）は、J. M. ケインズの血気（animal spirit）を想起させるのでぜひ紹介しておきたい。

(15) ヘクシャーやオリーンは生産要素価格が部分的にしか均等化しない理由にも、各国の生産要素賦存率の相違に注目していた。

世に処するためには、七分の俠気（義侠心）がなくてはならない。しかも、俠気のみならず、また、何人にも幾分の冒険心があることを要す。とはいっても冒険心のみあって、常識がなければ、これは無謀の変人になるのみである。もし、常識にのみ富み、冒険心がなければ、またこれは平凡きわまる凡人に過ぎない。人生の要は、七分の常識に、三分の冒険心を調合することによって、適当になるが如しである。

人間は、活動しなければならない。… およそ、社会も、国家も、広くいえば、人類も、いわゆる用心家に負うところは少く、冒険家に負う所が多いことは、古今の歴史が、実にこれが証人となる。アメリカ大陸の「発見者」のコロンブスにせよ、喜望峰を回って、インドへの航路を開始したバスコ・ダ・ガにせよ、いやくも人類の恩人帳にその名を登録される資格のあるものは、必ず幾分の冒険的血液がその血管中に流れているものである。(pp.42-4)

徳富も若者達に世界に乗り出すように誘いかけていた。

第3巻第25課「蓄財」は、カーネギー自伝『富の福音』の紹介で、『新訂日本実業読本』からの再引用であるが、カーネギーは他の実業読本でも引用されている。「蓄財は義務なり神聖なり」、「蓄財は徳行なり」と、事業家を志す人々を励ましてくれたのであろう。第27課「勤儉実行の順序」は安田善次郎談により、『再訂明治読本』からの再引用である。勤儉貯蓄を奨励して投機を戒めている。「投機事業の冒険なるは、何人も知らざるなし。資本の融通さえかなえば、何事も心のままに成就すべしと思惟するが如きは、大なる誤りというべし」(pp.77-8)。読本では投機批判が目につく。第29課「勤儉貯蓄論」は天野の書下ろしで、「勤儉、貯蓄の徳は、泰西〔西洋〕諸国民の、最も尊重する所にして、その効果古今変ることはない。したがって、これ実に、一方には、貯蓄者自身

にとって、非常の利益あるはもちろん、他の一方においては、もって、一国の資本を増加し、富力を進め幸福繁栄をもたらすための秘訣である」(p.84)と、幸福と繁栄を見据えながら、「貯蓄が投資を生み出し、資本を増加させる」という論理を展開している。第4巻第53課「信用組合」でも、多少なりとも余財を集めて、資本の増加に結び付けたい切実な思いが伝わってくる。

4. 宗教から切り離せる文明

本節では、福澤の著述活動をたどって、天野が福澤から受け容れなかったことを浮き上がらせておきたい。天野や彼の同世代たちの多くは福澤の著作を読み、自分で勉強し思考していく励みにしたといっていよい。言うまでもなく、ある人の著作を読んだからといってその全てを受容れるわけではないことは当然である。

福澤は1860(万延元)年に咸臨丸に乗り、初めてアメリカ西海岸で50日余り過ごした(桑原 1988: 70-79)。彼は1861(文久元)年12月から約1年、ヨーロッパ諸国を訪問した。1867(慶応3)年のアメリカ再訪では東海岸も訪問し、知的交流もはたして、多くの図書も購入した(戸沢 2002: 341-2)。そうした見聞と読書の成果として、福澤の『西洋事情』の初編(1866)、外編(1868)、二編(1870、明治3)が出版され、当時の日本人に西洋をわかりやすく伝える書物として明治期に大ベストセラーとなった(マリオン・ソシエ 2002)。しかしながら1875年の『文明論之概略』になると、福澤の論調はすこぶる挑発的になった。当時の日本の知識人に対して要するに、何が何でもとにかく西洋文明を勉強しなさい、というのが彼の主張の中心になったのである。時を経て、天野世代になると、「西洋文明」を猛烈に勉強するだけではなくなっていた。

福澤は漢籍の素養を持った上で西洋文献を読破し、『文明論之概略』緒言で「あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」と言った上で、西洋文明研究を堂々と奨励したのである。福澤のいう「文明」は「人

の安楽と品位との進歩」をいい、それを得るのは「人の智徳」とその進歩である（『福澤論吉著作集』第4巻, p.62）。今風にいうと、政府関係者や外交官だけではなく、民間人、一般人の智徳とその進歩が文明を構成する。そして徳は道徳（モラル）と言い換えられ、智にはニュートン力学など物理学、応用科学、世界地理（政治地理）、統計学等が含まれた。

天野は、福澤が褒めた仏教だけではなく、酷評した儒学、神道にも立脚した二宮尊徳の教義を採入れ、明治期以降に展開した報徳思想（報徳教）にも注目した。福澤が「徳」に関連して、送った見本と同じ品質の製品を輸出すべき事を説いていたことを参照すれば、「徳」は実業道徳や報徳思想の「至誠」と重なりあう。『文明論之概略』から現代文に近づけて引用しておこう。

又商売上に目前の小利を貪って廉恥を破ることがあれば、これは商人の不正といわれる。たとえば日本人が生糸産卵紙を製する際に不正を行って一時の利を貪り、遂に国産の品価を落して永らく全国の大利を失い、遂には不正者も共にその損亡を蒙るようなとき、面目も利益もあわせてこれを棄てることになる。（『福澤論吉著作集』第4巻, p.211）

福澤・天野の両者にとって、近代文明は「徳」や道徳、至誠なくして動かなかった。天野は当時の中国人の道徳の高さ（約束を守ること）に敬意を評し、日中の実業青年の交流を紹介し中国人留学生を受入れ、中国人に西洋文明も学ぶ機会を提供していたことも重要である⁽¹⁶⁾。

(16) 福澤の慶応義塾でも中国人・朝鮮人留学生を受け入れて、「西洋の学問」が教授されていた。「脱亜論」は1885年3月16日付『時事新報』に掲載された。これは『福澤論吉著作集』第8巻（2003）に収録されて、アクセスが容易になった。「脱亜論」が掲載された複雑な事情と背景に関して海外でも、都倉武之の「福沢論吉の外交思想」（2013）やこの論考を収録する小室正紀編『近代日本と福澤論吉』（2013）は紹介できると思う。近隣諸国の知識人のうち『西洋事情』（1866, 1868, 1870）での西洋紹介は歓迎しても、『文明論之概略』（1875）での儒学や儒者に対する厳しすぎる評価に反発した人が多かったのではないかと推察される。

最後に、福澤が『文明論之概略』で宗教の重要性を大いに主張したことに注目しておきたい。福澤は西洋文明がキリスト教に深く根差していることを日本人に明確に伝えたかったのである。そして、福澤は西洋文明のうち、あえて宗教から切り離せる部分も明らかにしたといえる。発明（技術や技術進歩）、応用科学、実業や国際貿易のあたりである。経済学者の天野為之とはといえば、このあたりの議論を参照して、「西洋文明のうち、宗教から切り離せる部分」を富田高慶の『報徳記』（1883）や福住正兄筆記の『二宮翁夜話』（1893）で二宮尊徳の経済思想と照合しながら、報徳思想に根付かせて、さらに明治期の経済や制度を考察していったといえる（池尾 2013a, 2014c）。もっとも、天野はこの種の議論では福澤を参考文献に入れていないのであるが、西洋文明にとっては「発明（技術や技術進歩）、応用科学、実業や国際貿易」もキリスト教から切り離すことはできないことを、福澤と同様に、天野もよく認識していたからであろう。

この関連で、福澤が『文明論之概略』において、西洋文明とキリスト教の関係を堂々と主張するものの、キリスト教そのものについては解説しなかったことにも注目しなければならない。徳川時代には鎖国政策が布かれ、禁教が実施されていた。1850年代以降の開港・開国後も禁教は続き、明治政府は禁教の方針を取ろうとしたものの、反対者達からの抵抗を受けて、神道・仏教以外の宗教に対する規制は徐々に緩和されて、19世紀末に信教の自由が認められるようになる⁽¹⁷⁾。福澤がキリスト教について解説しなかったことにはこうした背景があると考えられる。

(17) 本多庸一・山路弥吉「基督教」(1908)、岡田章雄「キリシタン禁制」(2015)、参照。武田清子(1959: 284)は「宗教」に関して、「西洋文化の精神的基盤としてのキリスト教をきりはなして西洋の技術や知識だけの輸入が官民一貫しての文明開化の風潮であり、また、方針であった」とし、「それでも明治初年より20年頃までにキリスト教は驚くべき進展をとげた」が、明治憲法(1889年公布、90年施行)および教育勅語(1890年発布)により、その勢いは止まったとしている。

5. 終わりに

天野為之編集の『実業新読本』は、天野の経済学、経済思想を知る上で不可欠である。天野にとって一般道徳と実業道徳の両方の重要性を生徒・学生達に伝えることが大切だったのである。国際貿易に携わるため、会社の中で働くため、また経営者や管理職として経営に携わる際にも、実業道徳は不可欠であった。天野の経済学では道徳が欠かせない要素であったことが明確に理解できる。

天野は東京大学でフェノロサから外国語で経済学を学び、初期の著書『経済原論』（1886a）や『商政標準』（1886b）では、外国人の著書や資料しか参考文献リストに挙げていなかった。しかし、『実業新読本』ではほとんどが日本人著作家からの引用であり、「経済学や商業教育の日本化」が達成されていたといえる。

天野はさらに1910年代、実業家として活躍した人々を早稲田実業の卒業式に招いて、成功体験を新卒業生に講演してもらい、その講演録を同窓会誌『大成』に収録し始めていた。講演者の多くが道徳に触れているのはおそらく天野の依頼によるものであろう。もし天野が大学にいたならば、組織的にケース・スタディーを進めたかもしれない。経済人の講演会は、東洋経済新報社が関与する経済倶楽部の創設（1931年）のヒントになったかもしれない。たっぷり道徳の要素が盛り込まれた、天野編集の『実業新読本』は、少なくとも早稲田実業で10年ほど教科書や読本として、天野以外の教員により使用されていたようである（天野 1924: 34）。

しかし、第一次大戦中（1914－18年）に高等教育制度の改革案が練られて実施に移された。1920年の段階で、商学や経済学の系統の学部を持っていた私立大学は、早稲田大学、明治大学、慶応義塾大学、法政大学、中央大学、日本大学、同志社大学であった。しかし、1919年に東京帝国大学と京都帝国大学に経済学部が設置されていた。商科大学の設立が1920年に始まり、同年に官立東京

商科大学（一橋大学）が、1928年に公立大阪商科大学（大阪市立大学）が、1929年に官立神戸商業大学（神戸大学）が設立された（池尾 1994, 2006）。そして天野にすれば、経済学から商業を切り離し、道德を追い払うように見える事態が発生し、蹉跌を味わったのであった（天野 1924: 3-4）。それでも、戸田貞三（東京帝国大学）が米コロンビア大学の経済学者エドウィン・セリグマン総編集の『社会科学事典』（1930-5）に「日本の社会科学」のエントリーを書いた時、経済学者として天野為之の名前を入れていることは記しておくべきであろう（Toda 1930: 322）。

後記 資料収集と事実確認に際して、木下恵太氏（早稲田実業学校 沿革史編纂室嘱託）と南川良典氏（早稲田実業）の温かい協力を得た。記して感謝する。木下氏の調査により、早実では空襲により学籍簿以外の資料を焼失していたこと、校友会雑誌『大成』のうち1905年、1917年、および1922年以降に発行されたものが保存されていたことが判明した。『大成』は国会図書館や早稲田大学図書館にもない。本稿は、早稲田大学2015年度特定課題研究助成費を受けた研究成果の一部である。なお、池尾（2012, 2013b）では、天野為之（1886ab, 1901, 1902ab）を検討した。池尾（2013a）とIkeo（2014ab）では、天野の経済学と二宮尊徳の教義の親和性に注目した。

付：天野為之編集『改訂 実業新読本』各巻目次

天野為之編集『改訂 実業新読本』巻一

- | | |
|----------------------|----------------|
| 1 大和心 | 30 巖島（漢文） |
| 2 勉強と怠惰と | 31 江の島鎌倉 |
| 3 勸学の歌 | 32 頼朝（漢文） |
| 4 新井白石 | 33 京の春 |
| 5 ジョージ、スチブンソン（一） | 34 嵐山（漢文） |
| 6 ジョージ、スチブンソン（二） | 35 銀行の話 |
| 7 東海道鉄道 | 36 恒産 |
| 8 山陽鉄道 | 37 三井八郎衛門（一） |
| 9 外国航路 | 38 三井八郎衛門（二） |
| 10 大船主アルフレッドジョーンズの生涯 | 39 毛利元就（漢文） |
| 11 世界は目前にあり | 40 金融の三王 |
| 12 銭屋五兵衛 | 41 素封（漢文） |
| 13 製茶の話 | 42 銀行に入れる少年に |
| 14 養蚕 | 43 善く働き善く遊ぶべし |
| 15 我が邦の米作 | 44 一張一弛（漢文） |
| 16 船津伝次平 | 45 一時一事 |
| 17 習慣は始めを慎むべし | 46 業（漢文） |
| 18 習（漢文） | 47 社会の組織 |
| 19 矢野二郎翁と一青年 | 48 生涯を終とせよ |
| 20 礼儀作法は忽にす可からず | 49 改過（漢文） |
| 21 礼（漢文） | 50 ボアソナード氏を送る詞 |
| 22 風景と経済 | 51 養鶏の感 |
| 23 日光 | 52 愛子羈旅（漢文） |
| 24 日光廟（漢文） | 53 白木屋創業譚（一） |
| 25 徳川家康の大度 | 54 白木屋創業譚（二） |
| 26 納善（漢文） | 55 友（漢文） |
| 27 富士山の眺望 | 56 岡田左平治 |
| 28 富士山（漢文） | 57 遠慮（漢文） |
| 29 瀬戸内海 | 58 孝（漢文） |

天野為之編集『改訂 実業新読本』巻二

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 分業の話 | 31 平賀源内 (二) |
| 2 分業の種類 | 32 接物宜従厚 |
| 3 独立の法 | 33 蘭学淵源 (漢文) |
| 4 紀貝原益軒 (漢文) | 34 電気世界 (一) |
| 5 当時の塾生 | 35 電気世界 (二) |
| 6 且春且読 (漢文) | 36 電信 (漢文) |
| 7 苦勞は百事に勝つ | 37 電話 (漢文) |
| 8 己百之 (漢文) | 38 特許の話 |
| 9 少年時代の苦学 | 39 信実 |
| 10 泰山精勤 (漢文) | 40 信 (漢文) |
| 11 採用試験 | 41 高値の笛 |
| 12 信長察微 (漢文) | 42 公の礼儀 |
| 13 己れを屈せよ | 43 礼 (漢文) |
| 14 謙 (漢文) | 44 敏捷 |
| 15 立志 | 45 瑞軒機警 (漢文) |
| 16 立志 (漢文) | 46 河村瑞軒 |
| 17 甘藷先生 (漢文) | 47 大阪商業の沿革 |
| 18 住友家の発達 | 48 秀吉築大阪 (漢文) |
| 19 鉄 | 49 朝鮮京城 |
| 20 鉄 (漢文) | 50 三韓征伐 (一) (漢文) |
| 21 石油及び石炭 | 51 三韓征伐 (二) (漢文) |
| 22 鉄道 (漢文) | 52 樺太 |
| 23 クルップ工場を観る | 53 近藤守重 (漢文) |
| 24 始伝鉄砲 (漢文) | 54 樺太境界制定行 |
| 25 ロンドン (上) | 55 間宮究満洲 (漢文) |
| 26 ロンドン (下) | 56 国民の義務 |
| 27 上海 (漢文) | 57 谷村計介 |
| 28 サー, タイタス, ソルト | 58 招魂社 (漢文) |
| 29 愛財甚 (漢文) | 59 明治天皇と今上陛下 |
| 30 平賀源内 (一) | |

天野為之編集『改訂 実業新読本』巻三

- | | |
|----------------|--------------------|
| 1 日章旗 | 33 敬（漢文） |
| 2 天業（漢文） | 34 秀吉拏鞋（漢文） |
| 3 天長節に就いて学生に告ぐ | 35 良友 |
| 4 天長節（漢文） | 36 益者三友（漢文） |
| 5 工業に就きて | 37 福沢先生より受けたる感化 |
| 6 我邦工業（漢文） | 38 瑞軒激友（漢文） |
| 7 維新後の織物の進歩 | 39 米賓歡迎の辞 |
| 8 布帛（漢文） | 40 友（漢文） |
| 9 運輸及び通信 | 41 然諾と拒絕 |
| 10 往時の交通機関 | 42 座右銘（漢文） |
| 11 岩崎彌太郎 | 43 邦人の性格 |
| 12 岩崎彌太郎の部下統御法 | 44 熊谷直實 |
| 13 角倉了以（漢文） | 45 英と米と独 |
| 14 冒険心 | 46 他石攻玉（漢文） |
| 15 始至欧州（漢文） | 47 マシャム卿の傳 |
| 16 レセップスの偉業（一） | 48 橋本五郎右衛門 |
| 17 レセップスの偉業（二） | 49 阪本藤吉製茶（漢文） |
| 18 膽（漢文） | 50 南洋通信（一） |
| 19 スエズ運河の開墾（一） | 51 南洋通信（二） |
| 20 スエズ運河の開墾（二） | 52 英国人の探検思想 |
| 21 禹王（漢文） | 53 閣龍伝（節略）（漢文） |
| 22 船に殉したる船長 | 54 登山と修養（一） |
| 23 鋼鉄王 | 55 登山と修養（二） |
| 24 子貢貯積（漢文） | 56 送友人登富嶽序（節録）（漢文） |
| 25 蓄財 | 57 水源の涵養 |
| 26 岡野左内（漢文） | 58 山林（漢文） |
| 27 勤儉実行の順序 | 59 海と岩 |
| 28 節用（漢文） | 60 海（漢文） |
| 29 勤儉貯蓄論 | 61 我が国の海産物 |
| 30 敬に就いて（一） | 62 捕鯨（漢文） |
| 31 敬に就いて（二） | 63 海上権 |
| 32 敬に就いて（三） | |

天野為之編集『改訂 実業新読本』巻四

- | | |
|------------------|----------------------|
| 1 新嘗祭 | 31 努力の堆積 |
| 2 寶祚無窮（漢文） | 32 鉛筆及び石盤に就いて上海よりの報告 |
| 3 三条公の略伝 | 33 渡清実業団歓迎会に於て（演説） |
| 4 忠益説（漢文） | 34 喩言二則（漢文） |
| 5 日本の農業 | 35 所感 |
| 6 書挿秧図後 | 36 士規七則（漢文） |
| 7 伊達邦成（一） | 37 英人氣質 |
| 8 伊達邦成（二） | 38 商人本色（漢文） |
| 9 興荒田記（漢文）（一） | 39 独逸人の勤儉 |
| 10 興荒田記（漢文）（二） | 40 人生在勤（漢文） |
| 11 北海道の喬木 | 41 時間の厳守 |
| 12 北海道海産（漢文） | 42 口腹の慾を恣にすべからず |
| 13 森林 | 43 衛生在口腹（漢文） |
| 14 木曾紀行（漢文） | 44 南州遺訓 |
| 15 廣澤安任の牧畜 | 45 鹿児島通信 |
| 16 陶朱猗頓（漢文） | 46 西郷南洲傳（漢文）（一） |
| 17 畜産業（一） | 47 西郷南洲傳（漢文）（二） |
| 18 畜産業（二） | 48 公德と私徳との関係 |
| 19 題小金原捉馬図卷（漢文） | 49 含蓄ある詞づかひ |
| 20 事業の人 | 50 言（漢文） |
| 21 美術の保護（一） | 51 支那人に学べ |
| 22 美術の保護（二） | 52 麴蕎麵者傳（漢文） |
| 23 雪舟（漢文） | 53 信用組合 |
| 24 圓山応挙（漢文） | 54 登高自卑（漢文） |
| 25 桃山時代の工業 | 55 ライファイゼン |
| 26 陶器（漢文） | 56 二宮尊徳の少時（一） |
| 27 頼山陽の書簡 | 57 二宮尊徳の少時（二） |
| 28 上楽翁公書（一節）（漢文） | 58 報徳教（漢文） |
| 29 化学工業に就きて | 59 大喪儀随従の記 |
| 30 陶工巴律西（漢文） | |

天野為之編集『改訂 実業新読本』巻五

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 元始祭及び紀元節 | 25 日韓合邦詔書 |
| 2 神武天皇紀賛 | 26 格言十則（漢文） |
| 3 大日本の国基 | 27 先勝帝国の実業的青年に告ぐ |
| 4 楠氏論（漢文） | 28 我邦実業之情形（漢文） |
| 5 憲法制定の由来 | 29 パナマ運河 |
| 6 聖徳頌（漢文） | 30 運河（漢文） |
| 7 日本国民の能力 | 31 マルコニー |
| 8 時宗殲元寇（漢文） | 32 和膽洋器説（漢文） |
| 9 高田屋嘉兵衛（一） | 33 世界之無線電信の著者に贈る |
| 10 高田屋嘉兵衛（二） | 34 喩言五則（漢文） |
| 11 山田長正傳（漢文）（一） | 35 先覚者 |
| 12 山田長正傳（漢文）（二） | 36 贈正四位佐久間象山先生碑（漢文） |
| 13 平壤の戦 | 37 高島秋帆 |
| 14 日本海の大戦（一） | 38 訓蒙皇朝史略序（漢文） |
| 15 日本海の大戦（二） | 39 開港以前の貿易 |
| 16 奉天之戦（漢文） | 40 航海朱印船（漢文） |
| 17 三十七八年役戦死者招魂碑記 | 41 福沢先生を悼む（一） |
| 18 帝国の膨張 | 42 福沢先生を悼む（二） |
| 19 秀吉の壮図（漢文） | 43 贈梶原君序（漢文） |
| 20 台湾人の風俗 | 44 岩倉公の逸事（一） |
| 21 濱田彌兵衛傳（漢文）（一） | 45 岩倉公の逸事（二） |
| 22 濱田彌兵衛傳（漢文）（二） | 46 書大久保甲東公遺墨後（漢文） |
| 23 龍岩浦沖よりの書簡 | 47 岩倉公所藏正宗鍛刀記（漢文） |
| 24 錦山神祠改建記（漢文） | 48 戊申詔書 |

参考文献

- 天野為之 (1886a)『経済原論』東京：富山房。複製版，早稲田大学，1961年。
- 天野為之 (1886b)『商政標準』富山房。
- 天野為之 (1890)『経済学研究法』博文館。
- 天野為之 (1901)『勤儉貯蓄新論』（講義）寶永館書店 東洋経済新報社。
- 天野為之 (1902a)『経済学綱要』東洋経済新報社。
- 天野為之 (1902b) 嵯鏡訳『理財学綱要』上海：文明編訳印書局。国会図書館近代デジタルライブラリー。 (<http://kindai.ndl.go.jp/>)
- 天野為之 (1910)『経済策論』実業之日本社。
- 天野為之 (1922)「新卒業生に対する訓示」『大成』大正11年3月号，pp.15-22。
- 天野為之 (1924)「新卒業生に対する訓示」『大成』大正13年9月号，pp.3-7
- 天野為之 (1925)「新卒業生に対する訓示」『大成』大正14年9月号，pp.17-24。
- 天野為之・塩沢昌貞 (1907)「商業教育」大隈編 (1907-8a) 上，pp.819-848。
- 天野為之・謹輯・西村茂樹校定 [1893] (1894)『小学修身経：尋常科生徒用』富山房。
- 天野為之・謹輯・西村茂樹校定 (1894)『小学修身経：高等科生徒用』富山房。
- 天野為之編著 (1913)『実業新読本』（全5巻）訂正再版，富山房。初版，明治図書，1911年。
- 浅川榮次郎・西田長壽 (1950)『天野為之』実業之日本社。
- 福澤諭吉 (1866)『西洋事情 初編』、『福澤諭吉著作集』第1巻収録。
- 福澤諭吉 (1868)『西洋事情 外編』、『福澤諭吉著作集』第1巻収録。
- 福澤諭吉 (1870)『西洋事情 二編』、『福澤諭吉著作集』第1巻収録。
- 福澤諭吉 (1875)『文明論の概略』、『福澤諭吉著作集』第4巻収録。
- 福澤諭吉 (1879)『民情一新』、『福澤諭吉著作集』第6巻収録。
- 福澤諭吉 (1893)『実業論』、『福澤諭吉著作集』第6巻収録。
- 福澤諭吉 (1897)『福翁百話』、『福澤諭吉著作集』第11巻収録。
- 福澤諭吉『福澤諭吉著作集』全12巻，慶応義塾大学出版会，2002-03年。
- 本多庸一・山路弥吉 (1908)「基督教」大隈編 (1907-8a) 下，pp.87-132。
- 福住正兄筆記 (1893)『二宮翁夜話』静岡：報徳図書館。福住正兄筆記・佐々井信太郎校訂 (1941) 岩波書店。中央公論社，2012年。
- 池尾愛子 (1994)『20世紀の経済学者ネットワーク：日本からみた国際化の歴史』東京：有斐閣。
- 池尾愛子 (2006)『日本の経済学：20世紀における国際化の歴史』名古屋：名古屋大学出版会。
- 池尾愛子 (2012)「天野為之と『マクロ経済学』の形成—経済学史上の再評価」『早稲田商学』(431)：645-683。
- 池尾愛子 (2013a)「天野為之と二宮尊徳の教義：推譲，仕法，そして経済教育」『報徳学』(10)：45-60。
- 池尾愛子 (2013b)「天野為之」『エコノミスト』9月24日号，pp.48-49。
- Ikeo, Aiko (2014a) *A History of Economic Science in Japan: The Internationalization of Economics in the Twentieth Century*. London: Routledge.
- Ikeo, Aiko (2014b) 'Tameyuki Amano and the Teachings of Sontoku Ninomiya: The Japanese Foundation of Modern Economics', presented at the 17th World Congress of International Economic Association, 6 - 10 June 2014, Dead Sea, Jordan.
- <http://www.webmeets.com/files/papers/IEA/2014/279/Ikeo-IEA2014b-Amano-Ninomiya.pdf>
- 池尾愛子 (2014c)「日本の実業教育の源流—天野為之と二宮尊徳の教義」国際二宮尊徳思想学会第6回大会，北京・清華大学，10月18-19日。
- 池尾愛子 (2015a)「天野為之と日本の近代化：明治期の経済学者，ジャーナリスト，教育者」『早稲

- 田商学』441/442: 313-329.
- 池尾愛子 (2015b) 「天野為之編『実業新読本』を読む—発明が社会を進歩させ、貿易が世界を変える—」日本経済思想史学会年次大会 (金沢星陵大学), 6月13-14日.
- 池尾愛子 (2015c) 「天野為之と福澤諭吉」『福澤諭吉の『文明論之概略』に寄せて』グローバル・フォーラム e 政策論壇「議論百出」9月26日, 10月3-4日 (<http://www.gfj.jp/j/>).
- 池尾愛子 (2015d) 「天野為之編『実業新読本』を読む (2) —発明, 国際貿易, 福澤諭吉—」日本経済思想史学会西日本例会 (関西学院大学), 11月1日.
- 井上勝 (1907) 『鉄道誌』大隈編 (1907-8a) 上, pp.569-598.
- 伊藤博文 (1907) 「帝国憲法制定の由來」大隈編 (1907-8a) 上, pp.119-138.
- 岩崎宏之 (2015) 「益田孝, 1848-1938」『国史大辞典』JapanKnowledge Lib.
- 小室正紀 (2002) 「解説」, 『福沢諭吉著作集』(第6巻「民間経済録」「実業論」), pp.289-364.
- 小室正紀編 (2013) 『近代日本と福澤諭吉』東京: 慶應義塾大学出版会.
- 桑原三郎 (1988) 『福澤先生百話』東京: 福沢諭吉協会.
- 益田孝 (1908) 「外国貿易」大隈編 (1907-8a) 下, pp.717-770.
- 南森茂太 (2015) 「神田孝平における『人民』」『経済学史研究』57(2)掲載予定.
- 新渡戸稲造 (1908) 「泰西思想の影響」大隈編 (1907-8a) 下, pp.161-198. 英語版 'The influence of the west upon Japan,' in *Fifty Years of New Japan*, volume 2, pp.458-476.
- 岡田章雄 (2015) 「キリシタン禁制」『国史大辞典』JapanKnowledge Lib.
- 大隈重信編 (1907-8a) 『開国五十年史』上下, 東京: 開国五十年史発行所. 再版, 東京: 原書房, 1970. *Fifty Years of New Japan*, 2 volumes, English version edited by Marcus B. Huish, London: Smith, Elder, 1909. 漢文版あり.
- 大隈重信編 (1907-8b) 『開国五十年史 附録』東京: 開国五十年史発行所.
- Pitman, Sir Isaac (1813-1897) (1905) *Commercial Reader: Senior Book*, London.
- Pomeranz, Kenneth (2002) *The Great Divergence: China, Europe, and the making of the modern world economy*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2000. 川北稔監訳『大分岐: 中国, ヨーロッパ, そして近代世界経済の形成』名古屋: 名古屋大学出版会, 2015年5月.
- Pomeranz, Kenneth and Steven Topik (1999) *The World that Trade Created: Society, culture, and the world economy, 1400 to the present*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe. First edition 1999, 3rd edition 2013. 福田邦夫・吉田敦訳『グローバル経済の誕生: 貿易が作り変えたこの世界』東京: 筑摩書房, 2013年8月.
- ソシエ・マリオン (2002) 「解説」『福沢諭吉著作集』(第1巻「西洋事情」), pp.341-351.
- 武田清子 (1959) 「宗教—プロテスタンティズムの土着の問題—」, 金子武蔵・大塚久雄『日本における西洋近代思想の受容』(講座 近代思想史 IX), 東京: 弘文堂, pp.281-304.
- Toda, Teizo (戸田貞三) (1930) 'Japan,' Section X of 'Introduction II-The Social Sciences as Disciplines,' in Volume One of *The Encyclopedia of the Social Sciences* (15 volumes, New York: Macmillan, 1930-5), edited by Edwin R. A. Seligman et. al., pp.321-323.
- 都倉武之 (2013) 「福沢諭吉の外交思想」, 小室編 (2013), pp.175-202.
- 富田高慶著 [1883]・佐々井典比古訳注 [1954] (1976) 『補注 報徳記』(上下) (改版) (現代版報徳全書 1-2) 一円融合会.
- 戸沢行夫 (2002) 「解説」, 『福沢諭吉著作集』(第4巻「文明論之概略」), pp.339-391.